



能福寺文庫活用のすすめ：古代地理学史に関連して

村上，次男

(Citation)

兵庫地理, 36:48-55

(Issue Date)

1991-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002374>



能福寺文庫活用のすすめ

—古代地理学史に関連して—

村上 次男

はじめに

兵庫駅から東南へ歩いて十分ばかりの北逆瀬川町に能福寺という寺院がある。戦前には寺の名前よりも「兵庫の大佛つぁん」の寺として知られ、境内にはいろいろな店が立ち並び、映画館もあったという。映画評論家淀川長治氏もここでよく映画に親しんだと懐古しておられる。

この寺の創建は延暦24(805)年というからもう11世紀も前である。最初は最澄上人(伝教大師、叡山大師)の教化霊場として建てられ、「能福護国密寺」と称された。中世の初め平清盛が福原に拠点を設けたのは、兵庫の津を拡充して、大陸交易の隆盛を計るためであったようである。平家の財源をこれに求めたのであろう。このことが兵庫興隆のきっかけとなったことはいままでのない。この寺が平家の菩提寺になったのは、そのころ以来のことである(1167年)。

兵庫の津の興隆が直ちに能福寺の繁栄を齎したわけではない。そういう時には必ず勝れた人が出現し、非常な努力をしたはずである。

能福寺中興の人としてどうしても12世紀末の住職小川忠快の名を忘れてはならない。彼は平教盛の長男であるから、清盛からいうとその甥に当たる。出家して平から小川と姓を改め、比叡山に学んだ忠快は、天台密教の秘法を極めた学僧といわれ、能福寺の住職となるや、七堂伽藍を建立完備したので、能福寺中興の人といわれる。今も忠快法印塔(九重塔)が境内に残っている。

そのころ、東は花隈(今の元町の北方)あたりから、西は須磨にかけて「福原西国三十三ヶ所」の霊場が設定され、善男善女が巡礼する姿が見られたといわれ、その第32番札所に当たっていた。「新西国観音霊場」としては第32番札所である。

この兵庫の津が江戸時代末期になって、外国貿易に開かれることとなり、新しい絶頂期を迎えたのはご承知の通りである。

明治の時代になり、兵庫の豪商に成長した南条莊兵衛の発願で、ここに大佛が建立された。

開眼法要は明治24年天台を始めあらゆる宗派を超越して行われたという。大正4年のサンフランシスコ万博に実物大の模型が出品されて以来、兵庫大佛の名で奈良・鎌倉と並ぶ日本の三大佛として海外にも知られたものであったが、戦時中(昭和19年)に赤い襷をかけられて、ただの金属として供出されるという非運に見舞われたのである。

地元の熱意によって浄財が集まり、その大佛がいよいよ再建されることになった。発表された新しい大佛の姿は、私の目から見ても、写真で見ると以前のものより、格段に美しく感じられる。それに像の高さは以前より3mも高くなり、11mに及ぶ。使用される銅の目方も50トンというから驚く。兵庫の地元の人とともにその完成を喜びたい。

それはそれとして、この能福寺にはもう一つ、われわれとして見逃せない貴重なものがある。それは大佛のように一般受けはしないだろうが、本当の値打は大佛を凌ぐものがあるだろう。そういう貴重なものが「能福寺文庫」である。

大佛再建の成就する機会にあたって、大佛以上に兵庫の名物になって欲しい「能福寺文庫」を、改めてここに紹介しておきたい。

1 文庫との出会い

この能福寺の現在の住職は、「兵庫大仏再建」の話題でたびたびTVの報道番組に登場している雲井世雄氏である。住職は甲南中高から甲南大学理学部に進み、物理学を専攻したので、中学生のころから、私とは顔馴染みであった。しかし当時はまだ親しく付き合っていたわけではない。在学中にクラブ活動で宇宙物理をやっていた関係からか、その古典を蒐集し始めたようである。ニュートンのプリンキピアの原本についての考察を学内の機関誌に掲載していたこともあり、西洋の天文学の古典を、神田の古書店から取り寄せているという話も耳にした。

そのころ、私は西洋の地理学史において、古代前期(ギリシア時代)と近代とはかなり研究され

ているのに、どれを見ても、古代後期（ローマ時代）とそれに続く中世の部分がお義理で一応触れてあるだけで、簡略に過ぎていることに不満を抱いていた。ヨーロッパの中世は「暗黒時代」という迷妄がそうさせていたのかもしれない。

そんな時、なにかの会合で雲井君に出会い、自分の蔵書のなかに古い地理学に関するものがあると聞いて、早速能福寺を訪れた。彼が取り出してきたのは、大判の分厚い書籍で、表紙には「ヘンリクス・ステファヌス Henricus Stephanus 編、1577年刊」としてある。ディオニシウス、ポンポニウス・メラ、エティクス、ソリヌスという地理学史でお馴染みの4人の名が見え、大きくコスモグラフィア *Cosmographia* と書かれてある。【図1】。これらの古代地誌については、改めて第三章で詳しく解説することにしよう。

『コスモグラフィア』の文字に彼は釣られて、この古書を注文したのらしい。コスモグラフィアをそのまま訳すと「宇宙誌」になる。そこで彼は

【図-1】 ステファヌス編著の扉

DIONYSII ALEX
ET POMP. MELAE
Situs orbis descriptio.

AETHICI COSMOGRAPHIA.
C. I. SOLINI POLYISTOR.

In DIONYSII poematum Commentarij EYSTATII: Interpretatio eiusdem poemati ad verbum, ab Elenr. Stephano scripta: necnon Annotationes eius in idem, & quorundam aliorum.

In MELAM Annotationes Ioannis Oliuarri: in AETHICVM Scholia Iofix Simleri: in SOLINVM Emendationes Martini Antonii Deirio.



Excudebat Henricus Stephanus
ANNO M. D. LXXVI.

自分の関心を抱いている天文物理方面の古書と思い込んだのだそうだ。東京の古本屋のカタログによる注文だから、一々中身を検討できないところに間違いの因があったのだろう。その間違いが私には幸いしたのだから、皮肉なものである。

この時代にはプトレマイオスの例の地理書が、1477年のボローニャに始まって、ローマ、フィレンツェ、ウルム、ヴェネチア、ストラスブル、バーゼル、ケルン、などの諸都市で次々に刊行された。これらはいずれも地図の復元の仕方の違いがあるし、1513年ストラスブルのもののように、編者（この場合ワルドゼーミュラー）によって新しく得られた地理知識を盛り込んだものも多い。これらの表題は「コスモグラフィア」としたものと、「ゲオグラフィア」としたものと二通りある。出版年度の若いものは「コスモグラフィア」としたものが主で、1500年代以降の出版からは「ゲオグラフィア」が目立ってくる。

つまり、中世末期から近世始めにかけてのころには、「コスモグラフィア」は宇宙誌というようなものではなく、地理学の別名であったと考えてよい。有名なアピアヌスやミュンスターのコスモグラフィアの内容を見ても、このことはうなずけるであろう。このことについては、以前に書いたことがあるので、ここに改めて論じることは避けよう。拙稿『地理学史上のコスモグラフィア』を参照して頂ければ幸いである（「甲南大学紀要」文学編、1970）。

早速、これら四つの古典をコピーするとともに、当時私の地誌を受講していた女子学生2人の協力を得て、ダンネマンなど科学史（もちろん雲井君の蔵書である）の関連箇所を写させて貰った。それらを資料として考察したものが、小牧實繁先生古希記念論集『人文地理学の諸問題』（大明堂、1968）所収の「コスモグラフィアの精神」の一文であった。これを目にした当時東京都立大学教授であった野間三郎君が、「ソリヌスの原本があるのなら、是非見せて欲しい」といつてきたので、雲井氏に頼んでソリヌスの部分だけコピーさせて貰い、そのコピーを送ったのを覚えている。しかし、彼がソリヌスについて、何らかの論考を発表したという話はまだ耳にしない。

このころはまだ「雲井文庫」と称していたが、のちに蔵書が1,000冊を越えるに及んで、昭和53

年、能福寺護持会基金による学術研究施設として「能福寺文庫」が設立されることとなった。現在能福寺講堂二階の一室がそれに当てられている。すでに場所が狭隘になってきたようであるが、この貴重なコレクションの方が、私には大佛よりもはるかに価値あるものに思えて仕方がない。

2 文庫中の希覯本

能福寺文庫には天文物理関係の珍しい古書がたくさん収蔵されている。その中で特に注目を惹くものを拾ってみよう。この内には日本にただ一冊しかはいつてきていないものも、かなり含まれていることはいうまでもない。

先ず挙げられるのはプトレマイオスの『アルマゲスト』であろう。プトレマイオス Ptolemaeus というのはエジプトの王家の名で、カエサルと浮名を流した有名な女王クレオパトラもこの王家に属している。『アルマゲスト』を著したプトレマイオスはクラウディウス Claudius という名で他と区別されており、紀元後2世紀前後にアレクサンドリアの図書館の長であったという（紀元120年より前に生まれ、160年より後に死んだ）。

彼の著作として最も重要なのが、この『アルマゲスト』 *Almagest* の名で知られる天文書である。alはアラビア語の冠詞、メギステはギリシア語からきた「最大の」ものという意味である。原著はもちろんギリシア語で書かれていたが、イスラム教が起ってオリエント地方を支配し始めたころ、アレクサンドリアを中心にアリストテレス、エウクレイデスなどのギリシア語の著作が盛んにアラビア語に訳出されたが、これは中でも重要な一つである。ギリシア語の原著は『数学集成』 *Mathematike Syntaxis* と呼ばれていた。

この本だけでなく、古い時代にははっきりとした書名というものはなかったようである。ツキジデス（トゥーキユディデス）の『戦史』とかヘロドトスの『歴史』とかは、後の人が他との区別のために付けた名称に他ならない。プラトンの著作も同様で、内容に応じて『ソクラテスの弁明』『クリトン』『饗宴』などと呼ばれるようになった。エティクスの著作を『コスモグラフィア』と呼ぶのも、後世に復刻する際の命名であろう。

プトレマイオスの『アルマゲスト』も、アラビア語の一種の渾名のようなもので、『偉大な書』

ぐらいの意味であることは、まえに述べた。プトレマイオスの著作としては4つのものが残っており、そのうちで最も重要なものが、この『アルマゲスト』なのである。その他は、各地の緯度経度を測定した有名な『地理』書、光の性質を述べた光学書、それに『第四の書』と呼ばれる古星術の奥義を説いたとされる著作の3つの書である。

『アルマゲスト』のギリシア語原本は13巻から成るが、アラビア語訳本も同じく13巻になっている。中世の末期にクレモナのゲラルド Gerhard によってラテン語に訳され（ca.1175）、ギリシア語のものもビザンティン（イスタンブールを中心として栄えた旧東ローマ帝国）から発見される一方で、トレビゾンドのゲオルク Georg によって原本から訳出されたラテン語本（1528）も作られた。

『アルマゲスト』の第1巻は、当初の書名通りに数理的で、正弦（sin）の値の表や、精密な円周率（ π ）の計算結果が出ている。 π の値についてはアルキメデスのもの（ $3.1407 < 3.1429$ ）より正確で、3.14167としている。天文書のつもりで読み始めた人は面食らうかもしれない。

第2巻にはいつて、初めて天文書らしい匂いがしてくる。そこに、①天蓋は球形をなしており、球のように回転する、②大地は全体として眺めるなら球形をしている、③地球は一つの中心に比せられ、全天蓋の中央に位置する、などと地球を中心とする体系、すなわち天動説を展開していくのであるが、そのいわば導入部をなしている。

第3巻以後に天動説を合理化するために詳細な解明を展開していく。特に各惑星の複雑な動きについてはそれぞれ周転円という運動の形を取り入れて説き明かしてある。この天動説の著作は、16世紀半ばにコペルニクスが現れるまで、その寿命を保っていた。1500年にわたっているわけで、このように長く実用価値のあった著作としては、『聖書』を除くと、エウクレイデスの『幾何学原本』13巻があるのみである。

能福寺文庫には、これらの貴重な古典が収蔵されている。クレモナのゲルハルト Gerhard によってアラビア語のテキストからラテン語に移されたもの（Venetia, 1515）、ギリシア語のテキストからラテン語に移されたもの（Venetia, 1528）、かつてレギオモンタヌス Regiomontanus が所有して

【図-2】「アルマゲスト概要」の扉



10. Regiomontanus: -Epytoma in Almagestum Ptolomaei. Venetis, 1496 -Incunabula-

いたギリシア語写本を印刷したもの (Basel, 1538)、これら3冊は日本には唯一の蔵書で、余所では絶対に見る事ができない。【図2】。

それほど古くはないが、珍しさという点ではひけを取らないのが、19世紀の初めに刊行されたアルマ Halma, Nicolas Abbe によるフランス語訳本である。これはギリシア語原典も併せて印刷して対訳の形をとっているところに特色がある。能福寺文庫にはこの訳本の原本 (1813-16) も所蔵されている。

『アルマゲスト』の他にも、日本で唯一冊のものがいくつかここに所蔵されている。天動説をひっくりかえして地動説を打ち立てたコペルニクス Copernicusの『天体の回転について』*De Revolutionibus orbium Coelestium*の第二版【図3】もその一つで、1973年国際天文連合 (IAU) の調べでは、この第二版は世界に131冊しか残っておらず、172冊現存している初版本よりも少ない。

この珍しいコペルニクスの第二版を、最近日本で別の人 (明星大学) が入手したという情報を耳にした。これで日本には2冊あることになる。

また、ニュートン Newtonの著書で万有引力を唱導した略称『プリンキピア』の第三版のうち、献呈用に別刷りされた豪華本も、日本では他に見られない希観書である。版を改める毎に改訂増補

【図-3】コペルニクス第二版の扉



Nicolaus Copernicus: -De Revolutionibus. Editio Secunda, Basileae, 1566.

されているので、この第三版が決定版というべく、著者が王立学会、ケンブリッジ大学、フランスの科学アカデミー、それに親友に贈るために大型の厚紙に印刷させたもので、製作部数は20部より少なかったとされている。同じ版の中型本 (200部限定) も同じくこの文庫に収蔵されている。

これらを含めて、能福寺文庫に所蔵されている希観書の主なもの10点を雲井氏に挙げて貰うと、次の通りであった。

1. Peurbach & Regiomontanus, -*Epytoma in Almagestum Ptolomei*. Venice, 1496. folio.
- * 2. Ptomemaios Claudios, -*Almagestum*... Venice, 1515. folio. Translation into Latin from Arabic text by Gerhard of Cremona. [bound with] *Quadripartitum [Tetrabiblos]*... Commentary by Gerge Valla. Venice, 1502. folio.
- * 3. Ptolematios Cl., -*Almagestum*... Venice, 1528. folio. Translation into Latin from Greek text by Georg von Trapezuntius.
- * 4. Ptolemaios Kl., -*Megales Syntaxeos [Almagestum]* ...Basel, 1538. folio. Revised by Simon Grynaeus.
- * 5. Peurbach, Georg von, -*Theoricarum Novarum [Planetarum]* ...Paris, 1515. small folio.
- * 6. Sacro Vosco, -*Sphaera Mundi*...and com-

【図-5】メラの冒頭頁

POMPONII MELAE
DE SITV ORBIS
Liber I.

PROOEMIUM

ORBITUM situm dicere aggredior, impeditum opus, & facundia minime capax (conflat enim ferè ex gentium locotumque nominibus, & eorum perplexo satis ordine: quem persequi, longa est magis quam benigna materia) verum aspici tamen cognoscere dignissimum: & quod si non 'ope ingenii' orantis, at ipsi sui contemplatione pretium operæ attendentium abloquat. Dicam autem aliàs plura & exactius: nunc autem vt quæque erunt clarissima, & strictissima. Ac primò quidem quæ sit forma totius, quæ maximè partes, quo singulæ modo sint, vtque habitentur, expediàm. Deinde rursus oras omnium & littora, vt intrâ extrâque sunt, atque vt ea subit ac circumluit pelagus: adiectis quæ in natura regionum incolarumque memoranda sunt. Id quò faciùs sciri possit atque accipi, paulo altius summa repetetur.

PETRI IOANNIS OLIVARII
ANNOTATIONES.

Proægitur operis pondus, varietatem, obfuscatem, & perplexum argumentum deinde quid in hoc libro & in aliis persequetur.
Dicere] Nam orator præstat. dicunt enim oratores, sed nouè Dicere pro Describere dixit.
Materia] Oratorium est.
Ope] Modestiam indicat.
Orantis] Nimirum talis voluit haberi in proœmio.
Forma] An videlicet spherica, rotunda, aut alterius figuræ.
Intra] Ad sinus refertur.
Additis quæ] Nihil aliud commemorabit spectat.

MVNDI IN QVATVOR PARTES
DIVISIO. CAP. I.

MN E igitur hoc, quicquid id est, cui mundi cælique nomen indidimus, vnum est, & vno ambitu se cunctâque amplectitur. Partibus differt, vnde sol oritur, oriens nuncupatur, aut ortus: quò demergitur, occidentis, vel occasus: quâ decurrit, meridies: ab aduersa parte, septentrio. Huius medio terra sublimis cingitur vndique mari: ad eamque in duo latera, quæ hemisphæria nominantur, ab oriente diuisa ad occidentem, zonis quinque distinguitur. Mediâ zellus infestat, frigus vltimas: reliquæ habitabiles paria agunt anni tempora, vniū non pariter. Antichthonæ alterâ, nos alterâ incolimus. Illius situ ob ardo rē intercedentis plage incognito, huius dicendum est. Hæc ergo ab ortu portea ad occidentem, & quia sic iacet, aliquantum quàm vbi latissima est longior, ambitus omnis Oceano: quatuorque ex eo maria recipit: vnum ab septentrione, à meridie duo, quartū ab occasu, suis locis illa referentur. Hoc primum, angustum, nec amplius decem millibus passuum patens, terras aperit, atque intrat. Tum longè latèque diffusum, abigit vastè cedentia littora ius.

A. i.

てインディア、ペルシア湾岸、エティオピア、そして最後を大西洋諸島で終わっている。

それに対して、3番目のエティクスAethicusのコスモグラフィアでは【図6】、世界を東西南北の4つに区分し、東洋 Oceanus orientalis、西洋 Oc. occidentalis、北洋 Oc. septentrionalis、南洋 Oc. meridianの4つに区分して、各地域の地方、沿海、都市、島嶼、河川、山名、種族の名称を列挙しており、その数はこの時代の他のどの地誌よりも多い。しかし名称の単なる列挙にとどまっています、説明らしきものはほとんどない。

エティクスについては余り知られていないが、彼がしばしばイステルのエティクスというように呼ばれるのは、彼がイストリア Istria (アドリア海北東部の半島にある町) の出身だからであろう。この世界地誌は、初め自分の言葉であるギリシア語で書いたらしいが、その内容から考えて、3~4世紀の著作とみられる。後にラテン語に翻

【図-6】エティクスの冒頭頁

107

AETHICI COSMOGRAPHIA.

Lectio perugili cura comperimus, Senatam populūque Romanum, totius mundi dominos, domitores orbis & præfules: qui cūm quicquid subiacet cælo, penetraret triumphis, omnem terram Oceani limbo circumdatam inuenerunt, atque eam ne incognitam posteris reliquissent, subiugatum virtute sua orbem totum quā terra protenditur, proprio limite signauerunt: & ne diuinam eorum mentem omnium rerum magistram aliquid præteriret, quam vicerant, quadripartito cæli cardine inuestigarunt, & intellectu æthereo totum quod ab Oceano cingitur, tres partes esse dixerunt, Asiam, Europā & Africam reputantes. Sed hinc magnum inter doctos certamē fuit. Nam pluri qui res diuinas euidentis agnouerunt, duas tantum partes accipiendas fuisse, id est, Asiam & Europam tantummodò: Africam verò censent Europæ finibus deputadā. Et reuera hoc ita esse, euidenti documento monstratur: quia non solum venerorū malè altera terram habet spatium, verumetiam est & cæli aduerso fydere plus delictua. Nā qui illam partem tertiam vocauerunt, non vt æqualem in clyctis præcellentibusque posuerunt: sed fitu pcfissimo, languidam ardoribus suis, in extremo positam, ab optimis se carunt: non diuisionis merito, sed sic vt incifa suis flutibus inuenitur. Itaque Iulius Cæsar, bis sextilis rationis inuentor, diuinis humanisque rebus singulariter instruat, cūm consularis sui fatescē erigeret, ex senatu consulto censuit omnem orbem iam Romani nominis admerito per prudentissimos viros, & omni philosophiæ munere decoratos. Ergo à Iulio Cæsare & M. Antonio c o s s. orbis terrarum metiri cepit, id est, à consulari superscripti vique ad consularium Augusti tertium & Cæsaris, annis xlii mensibus v. diebus xl. Zenodoto omnis oriens dimensus est, sicut inferius demonstratur. A consulari item Iulij Cæsaris & M. Antonij vique in consularium Augusti decimū, annis xxxix. mensibus viii. diebus x. à Theodoro septentrionalis pars dimensa est, vt euidenter ostenditur. A consulari similiter Iulij Cæsaris vique in consularium Saturni & Cinne à Polyclito meridiana pars dimensa est, annis xxxii. mensē l. diebus x. sicut definita monstratur. Ac sic omnis orbis terræ intra annos xxxiii, à dimensibus peragratus est, & de omni orbis continentia perlatum est ad Senatam.

IN AETHICI COSMOGRAPHIAM
SCHOLIA,

IOSIA SIMILIO auctore.

Nam pluri qui res diuinas] Opiniorum, qui negant Africam tertiam partē esse orbis terrarum, elegantē veribus expressit est à Luciano libro ix.
Tertia pars terrarum] Alia, si credere famam Cæsarē Sclia: at si venus celamque sequeant.
Pars est Europæ, nec enim plus littora Nilij,
Quam Scythicus Tamas, prima à Gadibus abfunt, &c.
Salutius, in diuisione (inquit) orbis terræ plerique in parte tertia Africam posuere: pauci tatummodò Asiam & Europam esse, sed Africam in Europa, & hanc orbis terræ in duas partes diuisionem M. Terentius Varro in i De re rustica libri capite 2, ad Eratosthenem refert.

V. ij.

訳されて僧院などでテキストに用いられるようになったのは、7世紀前後のことらしい(サートンの『科学史』参照)。

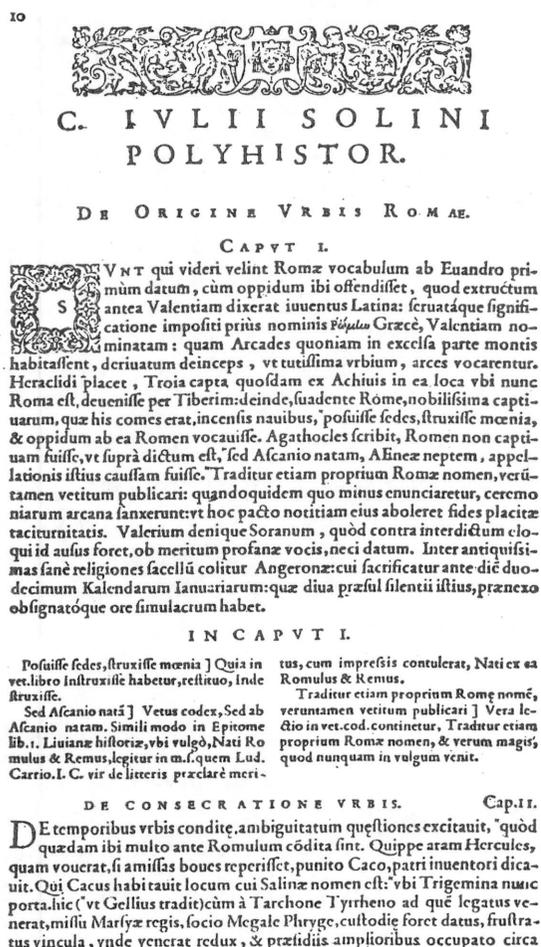
エティクスが東洋と呼んだのは、黒海-ナイル川以東の地で、エジプトもちろんこれに含まれる。西洋というのがサハラ以北のアフリカで、北洋はヨーロッパの中南部で、当時はまだロシア平原の方は知られていなかった。問題は南洋で、これだけはわざわざ大陸と断っており、メラの対蹠地という南の未知な大陸という想定の影響がみられる。

エティクスのコスモグラフィアには異本があって、Alia Totus Orbis Descriptio としてもそれも後半に付け加えてある。この方は完全に三大大陸説のままアジア・ヨーロッパ・アフリカという区分で叙述し、最後に「われらの海の諸島」Insulae Nostri Marisとして地中海諸島を記述している。私の知る限りでは、地中海を「われらの海」

Mare nostrum と呼ぶのはメラに始まるようであるから、明瞭にこの異名はメラの影響を受けたものといえよう。しかしこの内容は先の著述とは、地域区分もその内容も異なっているので、同一人の著述とは考え難い。

最後に収められているソリヌス Solinus, Caius Juliusの著作は、これまで一般に『記憶の集成』*Collectanea Rerum memorabilium*とされていたが、6世紀ごろからポリヒストール *Polyhistor* の名で流布されるようになった。ここでも通称に従い、“POLYHITOR”と題されている【図7】。そしてその名が示すように、各地の珍奇な事物を見聞のまま記述したもので、多分に先達のプリニウス Plinius (A.D.23-79)の匂いが強い。ソリヌスの著作が書かれたのは3世紀の後半であるから、プリニウスの影響がみられても不思議はない。

【図-7】 ソリヌスの冒頭頁



ソリヌスでは、世界を区分することをせず、各地を順に巡って珍しい風俗、それに生物を記述している。ローマの城から筆を起こし、コルシカ、シチリア、を経てバルカンに進み、また西に戻ってゲルマニア、ブリタニア、スペイン、アフリカに渡ってモーリタニア、エジプト、アラビア、ユダヤ、小アジア、カスピ海、インドから引き返してペルシアを経由、バビロンに終わっている。

こういう巡回していく形で各地の有様を述べて行くのは、ギリシア・ローマ時代の地誌類に多くペリエゲシス *Periegesis* の特色である。ここに収められている4つの古代地誌は、何れもこの形式を踏んでいるものとみてよからう。

以上、ステファヌス編著の古典的地誌の合本のあらましを紹介したが、文庫に収められているその他の地理関係の珍しい書物を探してみよう。

まず目につくのが、アレクサンダー・フォン・フンボルトの『コスモス』の全5巻から成る完本である。フンボルトは近代自然地理学の祖といわれるが、その科学的な代表作は『赤道地帯紀行』で、地理の教科書などでお馴染みの、ペルー沖のフンボルト海流、フンボルト・ペンギン、リオネグロスとオリノコ川の河川争奪などは、この労作に発している。しかし、一般的に有名なのは晩年の著作『コスモス』*Kosmos* に違いない。

その『コスモス』の初版本は雲井氏の勧めで甲南大学図書館が購入所蔵している。それは全4巻であるが、能福寺所蔵のものは全5巻別巻1冊からなる完本である。その第5巻は遺稿集で、フンボルトの没後、師を慕う弟子たちの手によって編纂され、付け加えられた。別巻図録は黒色の銅版印刷の輪郭に、一枚一枚手書きで着色された珍しいものである。

ただこれらはいずれもナチス以前のドイツ式のひげ文字で印刷されているので、ローマ字書きに慣れている若い学生たちには読み辛いであろう。能福寺には、その英訳本が所蔵されており、各章毎にかなり詳しい要約が付されているので、『コスモス』の内容を知るにはてっとり早い。

その他、プレトマイオスの『地理学』の日本語訳本もここにある。本誌35号に連載された南里章二君の『サハラ砂漠のキャラバン・ルート』のうち古代編を執筆するに当たって、この訳本が参照された。なお、この原本には多くの種類があるが、

オランダで作られたこれらの復刻本が甲南大学図書館に所蔵されていることを付記しておこう。文部省の助成金で購入したものである。

この他、インドの宗教的世界像に関する重要な著作『原資料に依るインドのコスモグラフィ』*Die Kosmographie der Inder nach Quellen* 1920 (希観書) がここに所蔵されているし、これは珍しいものではないが、私のような貧乏教師には高価で手の出ない古地図集もある。シャーリー-Rodney W. Shirley編の『世界の地図作成』*The Mapping of the World, Early (1472~1700) Printed World Maps* がそれで、ここへ来れば観ることができる。これはオランダの地図出版社 Holland Press Cartographicaから出された古地図シリーズの第8巻目で、世界図ばかりを集めている。第1~7巻はここには購入されていないが、それらはオーストラリアとかアメリカとかイギリス島とかの部分図なので、少なくとも私には余り重要とは思われない。

その他、後に述べるように、ここには多くの本の型録が保存されているが、パウルス・スヴェン Paulus Swaenの古地図の原色印刷の型録など、眺めているだけで楽しくなるであろう。

おわりに

以上の他に注目されることは、この能福寺文庫に行くとなんさんの古書籍の型録を見ることができることである。たとえば、貴重本を盗む癖があるので有名なリブリ (Guglielmo Libri)の数学・歴史・文献・および雑録の型録、ベルギー国立天文台の蔵書目録、クロフォード蔵書の型録など多くの目録が所蔵されているから、文献学や図書館学の研究の徒には見逃さないであろう。

先に触れたプトレマイオスの地理書は、近世初期に多くの復刻版が出されている。それらは復刻本というよりは、改刻版という方が適切かもしれない。その全目録もここ能福寺に所蔵されている。

それで数えてみるとこの時代に出たプトレマイオスの地理書というのが、驚くなかれ53種類もあるということ、私はここで初めて知った。

以上で「能福寺文庫」の紹介を終わるが、正直に言って、これらの科学的希観書乃至は古典それ自体を読んでみようという人はないであろう。これらは科学史上重要な古典にはちがいないが、それ自体の内容を研究してみても余り現代的な意味はない。

しかし、学問というものを、ただ調査の蓄積や知識の取り纏めと考えている人は別として、真の学問を目指す人にとっては、学問や科学がいかにあったか、そしていかにして現代に経ち至ったかを知り、自分の行っている研究がその中でどういう位置を占めるものかを考える必要がある。そういう学問研究にあたって、どこへ行けばどの資料あるいはどの図書を見られるかをわきまえていることは、学者として欠くことのできない知識にちがひなかる。そういう意味で、科学や学問に関心の深い人は、一度は必ず「能福寺文庫」を訪れて、本物の古典に接すべきではなかるか。

今後大佛が再建されて、参詣の人が増えてくると、あるいは文庫の管理が手抜きになってくるかもしれないと心配される。今は希観書の他は、全蔵書の目録や検索カードがまだ出来上がっていないが、それを整備していく必要もあろう。ずっと住職が暇々にやっておられたのだが、これからはだれか専門に文庫の世話をする人が必要になってくるにちがひない。それには、すでに定年退職された教員のうち、地理や天文に関心の深い心のある方をお願いして、カード作りや閲覧者の案内などを、ボランティアでやって頂いたらよいのではなかるか。

そういうわけで、大佛と並んでこの「能福寺文庫」が兵庫の名物となり、世の研究者たちが活用されることを、心から願ってやまない。

(むらかみ つぎお・本協会名誉会長)